

### 第3章 高崎市の歴史文化の特性

高崎市は、日本列島の中央付近にある群馬県の南西部に位置する。北西方向は山や丘陵が連なり、谷には川が流れ、その流れとともに地形は徐々に緩やかになり、南東方向には関東平野が広がる。古代から近世・近代を通じて交通の要衝で、陸の道、川の道を介して「人」「もの」「情報」「文化」がつながる結節点、東国屈指の交流拠点として発展してきた。時には火山による被害はあったものの、暑い夏には雷とともに恵みの雨が降り、冬でも降雪は稀で、稲と麦の二毛作を行うことができ、養蚕業の盛んな地として栄えてきた。

このように山と川に生まれ、交通によって発展してきた高崎市の歴史文化の特性を、地理的・自然的・社会的・歴史的な特性と歴史文化資産の様相を踏まえて分類すると、以下の六つの代表的な特性があげられる。

高崎市の歴史文化の特性	
(1)	交通と伝承の歴史文化 ～交通の要衝を舞台に展開する物語～
(2)	大地の歴史文化 ～大地と石に遺された東国文化先進地の証～
(3)	まちの歴史文化 ～変容する商都 軍都から音楽のあるまち高崎へ～
(4)	蚕糸にまつわる歴史文化 ～絹と蚕とともに栄える暮らしと産業～
(5)	山と信仰の歴史文化 ～榛名山への畏敬の念～
(6)	水と生業の歴史文化 ～山から都市へ川がつなぐ高崎の生業～



図 3-1 高崎市の歴史文化の特性の概念図

## （１）交通と伝承の歴史文化 ～交通の要衝を舞台に展開する物語～

古墳時代の初め、当地の人々の移住や技術を導入した水田や集落の開発は、太平洋側から荒川や利根川を遡る「川の道」によるものである。また、古墳時代、当地には後の東山道駅路の前身ともいべきルートが通っており、それにより渡来系文物や先進技術等がもたらされたと考えられている。そうしたルートや河川に沿って残された多くの古墳はそのことを物語っている。

律令国家が成立すると、奈良の都と各国の国衙を結ぶ駅路が整備され、東山道駅路が通る当地には国分寺が置かれ、各郡には郡家<sup>くわんけ</sup>が置かれた。平安時代末期から鎌倉時代にかけて、東山道駅路の道筋をほぼ踏襲した「あずま道」が通じ、新たに「鎌倉街道」も整備された。その結節点である当地には、各地方から人や物、文化が集まり発展した。平安時代末には街道が交差する寺尾・山名・豊岡・里見を含んだ地域に八幡荘（荘園）が成立し、展開した。そして平安時代末の内乱期には寺尾城や多胡荘が武士の歴史の舞台となった。また、鎌倉幕府執権北条時頼に関わる伝説「鉢木」には「佐野の舟橋」も登場する。

戦国時代、長野氏によって築城された箕輪城<sup>みのわ</sup>は、戦乱を経て井伊直政が城主になった。その井伊直政が中山道と三国街道の要衝にあたる和田に城を移し、地名を高崎と改めたことは、現在の「高崎」の地名の由来として有名である。

江戸時代、江戸と上方を結ぶ中山道と宿場が整備され、当地には新町宿、倉賀野宿、高崎宿が設置された。参勤交代が制度化され、大名行列が通過し、多くの武士や庶民、文化人が中山道を往来し、人・もの・文化の相互交流はさらに加速した。庶民の間にも聖地巡礼や湯治の旅が流行し、街道の辻には榛名神社、白岩観音や草津温泉などの行き先を示す「道しるべ」が多く建てられた。

幕末期には、攘夷を掲げた天狗党が吉井宿を通過し、それを追いかけた高崎藩、吉井藩と下仁田戦争を起こした。また、倉淵に隠居していた小栗上野介のもとへ高崎藩・吉井藩などが向かい、小栗を捕縛後処刑した。さらに、明治17年（1884）には中山道に沿って上野・高崎間の鉄道が開通し、その後も複数の鉄道が高崎に乗り入れた。昭和時代には新幹線や高速道路などの高速交通網が発達し、高崎に文化的経済的発展を導いた。

古代から幕末、近現代に至るまで語り継がれる様々な物語は、当地の交通の要衝を舞台に展開している。

## （２）大地の歴史文化 ～大地と石に遺された東国文化先進地の証～

古墳時代、榛名山の大噴火で広域に降下した火山灰や軽石、それにより発生した泥流等は、水田や畠、集落、古墳などを埋め尽くした。これらの遺跡から当時の社会を知ることができる。

古墳時代、東海地方からの人々の移住や技術の導入、畿内との交流により平野部の水田や集落の開発が行われた。高崎地域を治めていた首長は、ヤマト王権との確固たるネットワークを形成するとともに、交流によって獲得した渡来系文物や馬生産に代表される先進技術等を積極的に導入した。農業生産や先進技術を基盤にして、当地の首長は

上毛野地域の中でも優位な立場にあり、東国屈指の大型前方後円墳を築造した。

大陸文化の積極的な導入の影響は、飛鳥から奈良時代初期にかけて相次いで建立された石碑からも窺える。石碑を建てる文化は古来日本にはなかったもので、全国的にも現存する古代の石碑・石塔は18基のみで、そのうちの3基が集中する本市南部は特異な地域である。

律令国家の成立後、上野国にも国府が置かれ、各郡には郡家が設置された。聖武天皇が全国に国分寺建立を命じると、上野国府の近くに上野国分僧寺と上野国分尼寺が建立された。

当地の人々は畿内や大陸の情報に一早く触れ、先進技術や文字文化、仏教文化を導入するなど、先進性を有していた記憶が、大地や石に遺されている。

### **(3) まちの歴史文化 ～変容する商都 軍都から音楽のあるまち高崎へ～**

江戸時代、高崎宿には六斎市ろくさいいちなど市が立ち、「お江戸見たけりゃ高崎田町 紺の暖簾がひらひらと」と詠われるほどの賑わいを見せ、地域経済の拠点として繁栄した。

明治時代になると、中山道に沿って、内陸と太平洋側との物資や人を運ぶ大動脈となる現在の「高崎線」が敷かれた。その後、信越本線、両毛線、上野鉄道こうずけ（現：上信電鉄）などの鉄道が次々に開業し、高崎の交通網はさらに発展した。市内には、絹市場と蚕種市場が開設され、全国から蚕種の仲買業者が出入りし、「日本一」と言われるほど活発な取引が行われ、両市場は商都高崎を象徴する場であった。他方、旧高崎城内には陸軍歩兵第15連隊第1大隊が、市の南東部の岩鼻代官所跡付近には陸軍岩鼻火薬製造所がそれぞれ設置された。また、それらの周辺は将校の接待や兵士に会う家族や軍の関係者などが利用する飲食店や宿泊施設などがあり、賑わいをみせた。

大正期、高崎板紙・上毛製粉・高崎水力電気などの企業が設立され近代産業が盛んになり、金融界では地元資本を集めて上州銀行がつくられた。しかし、昭和初期、産業界や経済界は混乱し、景気は急激に悪化し、高崎は軍都としての性格を次第に強めた。

戦後、多くの人々が敗戦のショックから立ち直れないでいる中、高崎市民オーケストラが結成され、その後、建設費の一部が市民の募金活動により賄われた音楽ホール「群馬音楽センター」が建設された。

その後も、交通優位性を活かして企業誘致を進め、その経済力を背景に近現代の文化芸術を発展させた。「音楽のあるまち高崎」というフレーズは平成2年（1990）にはじめて使用されて以来30年以上、現在に至るまで音楽祭とともに使用されている。

高崎のまちは、江戸時代から商都として賑わい、一時は軍都としての変遷を経て、「音楽のあるまち高崎」として当地の文化芸術を市内外へ発信している。

### **(4) 蚕糸にまつわる歴史文化 ～絹と蚕とともに栄える暮らしと産業～**

幕末の横浜開港とともに、生糸の主力輸出品となり養蚕業は繁栄を極めた。明治初期には、新町に我が国最初の官営絹糸紡績工場も開業した。

江戸時代の高崎城下には、緩やかに傾斜した地形の高低差を利用して水路が張り巡らされていた。この水と絹市の絹を使い、染色業も盛んであった。職人や商人も揃い、「高

崎に来れば、染物の仕事はだいたい間に合う」と言われるほどの「染物の街」であった。

江戸時代から近代にかけて農家の生計の中心は、繭や生糸であった。養蚕に関する様々な道具が作られ、豊蚕を願う小正月の繭玉づくりやだるまが生産され、蚕影山・絹笠明神などの蚕にまつわる信仰もあった。農家にとって蚕は特別な存在であり、蚕とともにある暮らしが日常であった。養蚕が盛んだった当地では、一面に広がる桑原とその中に点在する養蚕農家の大きな屋根が景観の特徴だった。

養蚕の農閑期である冬、平地部の農家では、雪の積もらない気候を生かし、小麦の生産も盛んであった。養蚕で多忙な農家にはうどんの製麺機が重宝され、焼きまんじゅう、おきりこみ、おやきなど独特な粉食文化も発達した。

当地では、古くから絹と蚕が常に身近にあり、それらが暮らしに密接に関わり合い、それらに関連する独自の風習や民俗などがあった。また、それらは当地の近代化、産業化を進めた。

### （５）山と信仰の歴史文化 ～榛名山への畏敬の念～

高崎のシンボルとして山容を誇るのは、市北部に位置する榛名山である。榛名山は、かもんがだけ掃部ヶ岳、相馬山、ニッ岳など複数の山から構成される山体の総称である。榛名山は繰り返し起きた火山活動により形成された起伏に富む山頂部と、火山麓扇状地と呼ばれる広い裾野が特性である。山頂には火山活動によって形成されたカルデラ湖の榛名湖と溶岩円頂丘の榛名富士がある。この地形とその火山活動が遺跡群の形成に果たした役割は大きい。

古来、高崎は榛名山から数多の災厄と恩恵を受けてきた。そこから流れる川は農地を潤し、度重なる大噴火は榛名山への信仰を高めたと考えられ、榛名山への信仰を示す遺跡も多く残る。古墳時代の遺跡からは人々の榛名山に対する畏れを推測させる土器祭祀遺構が出土している。平安時代には榛名山に対する信仰と仏教が結びついたと見られる遺跡もみられる。中世には武士の厚い信仰を集め、近世に入ると関東各地に「榛名講（村単位の集まりで代表者が参詣）」が広まり榛名神社を中心に多くの人々が訪れ、門前町が形成された。

榛名湖は、万葉集にも詠まれ上野国を代表する景物として広く知られた。近現代には榛名山は、伊香保とともに県内有数の観光地となっている。また、火山灰が堆積した東南麓には、かつて養蚕のための桑原が広がっていた。現在は斜面地を活かしたウメ畑、ナシ畑などの果樹園が広がり、独特の景観を形成している。

高崎には榛名山から受けてきた「陰」と「陽」があり、榛名山は現在も多くの人々が大切に想う山である。古墳時代に噴火を経験した人が見ていた榛名山を望む景色、この地に住む人々が見続けてきた景色が今もここにある。

### （６）水と生業の歴史文化 ～山から都市へ川がつなぐ高崎の生業～

榛名山は豊かな扇状地を形成し、扇状地末端部には伏流水を湧出させた。また、そこから流れ出る榛名白川や井野川、さらに市の西方向から流れる烏川や碓氷川、それら各河川に集まる水資源は豊かな動植物を育み、弥生時代以降当地の耕地開発が推し進めら

れていった。

弥生時代、日高遺跡にみられるような小谷地を利用した水田が営まれ、その付近には集落も形成された。古墳時代には「川の道」によって人々の移住や技術の導入が進み、井野川中・下流など広大な低地でも水田や集落の開発が進み、大規模な用排水路が整備され、川沿いには多くの古墳が造られた。そして、古代になると条里制に基づいた地割の水田が整備された。

江戸時代には利根川水系の舟運の拠点として、倉賀野河岸は地域経済の発展や文化の交流に大きな役割を果たした。倉渕地域の森で育った木材は江戸城修復の材料として烏川を下り江戸まで運ばれた。

明治以降、川の水は農業や工業の動力となり、地域の産業の発展のために利用された。また、長野堰用水や滝川用水に代表されるような大河川から取水する用水路の整備が試みられるなど、豊富な水資源を巧みに利用することで、豊かな農業基盤が形成されてきた。

川は山と都市をつなぎ、川を流れる水はヤマの草木を育て、ムラの田畑を潤し、マチの動力として利用され、人々の生活を支えつづけてきた。